

◇健康システム学科 主要科目の特長

科目	特長
基礎ゼミⅠ	<p>知的活動への動機づけを高め、科学的研究のための主体的学習のオリエンテーション機能を果たします。学科教員全員が、それぞれのチューター学生を担当し、大学教養の範囲を超えない共通基礎領域の教材を用い、共通の授業計画に則って、担当教員の専門性を通して学習へのモチベーションを高めます。今後、大学での学習活動が円滑に進められるように、ゼミナール形式の授業の利点を活かし、学生と担当教員がコミュニケーションを取り合い、相互に尊重し合い、高め合う効果も期待されます。</p>
基礎ゼミⅡ	<p>基礎ゼミⅠでの学修を踏まえ、各ゼミにおいて、担当者の専門領域におけるテーマに沿って、学習のスキルアップと研究の方法や学習成果の公表の仕方などを実践的に学んでいく。ゼミナール形式の利点をいかした対人関係能力の向上と、相互に学び合い高め合う関係性の中で、学科の専門領域を理解すると共に、高度学習に対応できる基礎力を養います。学生は、積極的にテーマに取り組むことで、各自が学習の主体であるという自覚と各自が抱く大学での学習目標や研究目標を明確にしていきます。</p>
健康科学序論	<p>健康と疾病は連続性を持っている。普段は当たり前のように考えがちな「健康状態」は、実は壮大かつ精巧な生体メカニズムによって維持されている。健康科学序論の授業においては、健康状態およびその維持についてのメカニズムを理解することで「健康であること」の大切さを再認識し、疾病予防や健康づくりに役立てます。</p>
健康科学	<p>健康な状態を維持するために、普段からの健康的な生活が重要である。日常生活が健康に及ぼす影響や各年代において健康を保持増進させるのに重要な因子を理解し将来に役立てることを目的とする。運動、食生活、睡眠、休養などの日常生活と健康との関連や各年代における健康に影響を及ぼす生理的な現象等を科学的に理解を深める講義をおこないます。</p>

◇健康システム学科 主要科目の特長

科目	特長
健康統計の基礎	<p>健康科学を学ぶ上で必要となる、コンピュータを利用した、統計手法の基礎を身につけることを目指します。具体的には、調査・実験から得られた資料(データ)を整理し、資料の特徴をあらわす数値を求めたり、確率を利用して資料のもととなる集団の特徴や傾向を推測する手法について学びます。また、実際の統計処理で使用される、表計算ソフトを利用した演習を通して、理論だけでなく実際の処理のながれを理解します。</p>
解剖学	<p>ヒトが正常な機能を営み、生きていくために、体の中では極めて多くの精密な構造・機能が複雑に絡み合って、体全体としての調和をとっている。その基準となる正常な構造・機能を十分理解しなければその変化である種々の異常を知ることは不可能である。生涯にわたる人間の健康の維持増進に寄与・貢献していくために不可欠な知識を学んでいきます。</p>
健康心理学	<p>健康心理学は人間の健康を主として習慣に着目して科学的にとらえようとする学問です。その学問領域は広く、人間の生きるという目標に関わる全てが対象になります。心理学としては異色の「身体的な健康」と「精神的な健康」とを根元的な結びつきの中で捉えようとしていることと、障害や疾病の状態ではなく健康を中心課題としているところに特徴があります。心理的要因がいかに関身健康に影響を及ぼすかを学び、自他の健康へのアプローチに関する理解を深め、運動指導や生活習慣の改善・行動変容への実践的活動に結びつく能力の育成を目指します。</p>
臨床心理学	<p>臨床心理学とは、こころの治療に関する心理学である。開拓者フロイトは大人の患者との精神分析治療の中で、こころの発達における幼児期の体験の重要性を発見しました。フロイト以降の研究者は、フロイトの理論を基礎にしながら、より年少の乳幼児と母親との関係に焦点をあて、対象関係論をうちたて内的世界の理解をしようと研究を進めました。授業ではこころの治療研究の歴史をたどりながら、人のこころの発達の理論について学び、人と人が関わることで育まれる関係性の理解と自分自身と他者のこころの理解を目指します。</p>

◇健康システム学科 主要科目の特長

科目	特長
教育特論 I	<p>大学生にとって、大学で修得した知識と技能を就職・進学といった具体的な進路に結び付けることは、社会的・職業的に自立した人間となるために大切です。そのためには、自分のキャリア（生涯にわたっての仕事や社会とのかかわり方）についての明確な課題意識を持つことが重要となります。授業では、主に教員採用試験や公務員試験の一般教養・一般知能に関する基礎知識と問題解答能力の習得を通じて、受講生一人ひとりが自身のキャリアに向けての目標と課題を明確にし、その課題に取り組む力を養うことを目指します。民間企業の採用試験対策にも役立つ内容も取り上げます。授業は、複数の学科専任教員が入れ替わりで担当する、オムニバス形式で進めます。</p>
地域活動演習 I	<p>地域社会における運動指導現場やボランティア現場等に参加し、実際の活動を通して、社会人としての行動を身につけ、指導者としての心構え、指導法及び現場における課題等を体験的に学習します。実習先は、民間・公共のフィットネス施設、各種スポーツクラブ及びチーム、学校や教育施設、地方公共団体や非営利的目的の諸団体等、その他、担当者が認めた施設・各種団体になります。</p>
運動の基礎	<p>運動とは、1 つには「運動不足」や学校体育における「運動領域」といった、生物学的・教育学的目的を達成するために何かを反復的に行う身体活動のことです。2 つには、学習指導要領に見られる「体づくり運動」「器械運動」「陸上競技」「球技」など体育における学習活動のある特定の領域やスポーツ種目が運動と表現されている。これら運動の役割について理解することを目標とします。</p>
運動生理学	<p>日常活動における身体運動が人体機能にどのような応答をするのか、また継続して身体活動を行った場合にはどのような適応を示すのかについて、その生理学的な機序を学習します。学習する主な点は、(1)運動と健康との関係について(2)人が運動する場合の生理・生化学的機構について(3)運動による人体機能の応答・適応について(4)運動処方（運動強度）の意義と方法等について、であり、これらについて詳細に講述します。</p>

◇健康システム学科 主要科目の特長

科目	特長
運動栄養学	我々の健康を維持・増進させるためには、栄養・運動・休養の三要素が必要で、特に栄養は毎日の生活の基礎である食事や食生活のあり方につながるだけに重要であり、健康やスポーツに携わる者にとり基本的な栄養知識は必須です。そこで、健康と栄養や運動の関わりを中心に、栄養学の基礎と運動時のエネルギーや栄養素摂取のあり方と問題点について述べます。
幼児運動実践演習	幼児期における有効かつ正しい運動実践を考える。この時期の発育発達特徴を把握することにより適した実践方法を考えていく。附属幼稚園児と一緒に運動実践する機会を持ち、幼児の特性を理解する機会を持つ。さらに、幼児期における運動実践の指導方法も併せて修得していく。この科目で学んだ内容が、幼児体育指導者やジュニアスポーツリーダーの資格取得に有効に結びつくことを期待する。
障害者スポーツ論	スポーツは、健常者だけが楽しみ豊かな生活と健康維持のために行うものではなく、障がいのある者も健常者と同等に生活に不可欠なものである。障がい者がスポーツをするには、健常者のように直ぐにスポーツが出来るのではなく、準備期間が必要であり、障がい者スポーツの本来の意味を理解するとともに、理論と実技指導が出来なくてはならない。障がい者がスポーツをする事により、機能回復とスポーツがもたらす特性が、豊かな生活に結びつくので、一人でも多くの障がい者がスポーツに参加できるよう啓蒙・啓発活動と実践が行える指導者の養成を行います。
トレーニング科学Ⅰ	トレーニング指導において必要な基礎知識(運動生理学、解剖学、トレーニング理論、方法論等)の習得をレジスタントトレーニングを中心におこないます。テキストで基礎の理論を理解し、実際にレジスタントトレーニングを行うことでより理解を深め実践力を高めます。健康運動実践指導者の対象科目です。
スポーツ実践演習Ⅰ	授業計画に示す内容のスポーツ種目や学校体育種目を実施する。方法として、個人・グループ毎に実施種目のルール確認と正しい実践方法の理解。実施種目は、個人・グループ毎に授業計画に示す全種目を経験する。各自がこの授業を通して体得したものが、Ⅱ期開講のスポーツ実践Ⅱに有効に活用されることを期待する。随時体力測定を実施し自己の体力レベルを把握する機会を持ち、体力の維持増進に努めること。さらに、学校施設内で実施不可能な種目(水泳等)については定期時間外に集中講義を実施する。

◇健康システム学科 主要科目の特長

科目	特長
健康・体力づくり実践演習Ⅰ	授業計画に示す内容のスポーツ種目や学校体育種目を実施する。方法として、個人・グループ毎に実施種目のルール確認と正しい実践方法の理解。実施種目は、個人・グループ毎に授業計画に示す全種目を経験する。各自がこの授業を通して体得したものが、以降の授業に有効に活用されることを期待する。随時体力測定を実施し自己の体力レベルを把握する機会を持ち、体力の維持増進に努めること。さらに、学校施設内で実施不可能な種目(水泳等)については定期時間外に集中講義を実施する。
スポーツ指導法	運動実践を通して体育指導者としての指導能力を養うことを目標とする。1、2年次に履修した「スポーツ実践演習Ⅰ・Ⅱ」「健康・体力づくり実践演習Ⅰ・Ⅱ」においてスポーツや学校体育における正しい実践方法を再確認すると共に指導方法を身につける。具体的には、様々なスポーツや学校体育における実施種目の実戦を通して段階的な指導方法やその際の指示助言等を学ぶ。
運動処方論	運動ならびにトレーニングは、競技力向上だけでなく、生活習慣病の予防や改善、高齢者が健康で豊かな生活を送るための重要な事項となっています。よって、指導者は安全かつ効果的に運動を行うために必要な事項を学ぶ必要があります。授業は、運動処方の目的、方法を運動生理学の面から学びます。
レクリエーション(野外活動を含む)	現在のレクリエーションは、スポーツと文化活動を包含する幅の広い自由時間の過ごし方として生涯学習と同様なものとなっています。そこで、レクリエーションの果たす役割について理解し、活動(イベント)を通して参加者の意欲を引き出し、魅力のある活動や運営の仕方を学ぶとともに、実際に展開することで実践力を養います。
養護概説Ⅰ	子どもたちの心とからだの健康課題が社会情勢の変遷とともに変化してきているように、養護教諭の役割もその時代、時代で求められるものが変わってきました。この授業では「学校教育とは」を問いながら、これまで各自が児童生徒側からとらえてきた養護教諭像や保健室のイメージを教師性と専門性の視点から再構築することをめざします。また日々の情報の中から、教育課題や児童生徒の健康に関する課題に関心を持ち、一人ひとりがその解決策を考えることで健康観、教育観、豊かな児童生徒観を育てることができるよう、グループワークを取り入れ授業理解を図ります。

◇健康システム学科 主要科目の特長

科目	特長
<p>養護活動演習 及び 養護活動実習</p>	<p>「養護活動演習」では、養護教諭が行う教育活動を、実践場面を構成したなかでグループワークを通して展開していきます。児童生徒の健康課題を解決するための養護活動の理論を、教育現場で行われている実践とを往還しながら学びます。さらに、「養護活動実習」では、これまでに演習的に習得した保健室の機能と養護教諭の専門的役割を基盤にして、実践的な養護活動の知識と技術の統合を、学内実習を通して構築していきます。併せて児童生徒の健康課題に応えることのできる養護活動の実践力を高めます。</p>
<p>学校保健Ⅱ</p>	<p>学校保健は、子どもたちの命と健康をまもるための教育活動であり、教育に携わる者に必要な使命です。学校保健Ⅰの学修内容をもとに、学校保健活動の実際についてその理論と方法を学び、児童生徒の健康づくりとともに学生自らの健康行動化への意識を高めることをねらいとしています。学校保健のなかでも保健管理の領域を中心に、学校安全を含めて必要な知識や技術を修得するとともに、児童生徒の心と体の健康づくりについて理解を深めます。</p>
<p>精神保健</p>	<p>心の健康・心の問題について正しく理解し、専門的知識を実践で活かすことはさまざまな分野において必須です。運動あるいは養護・保健の専門家として、幼児から高齢者まで発達段階に応じた心の健康・心の問題について正しく理解します。次に、心の病的状態についても精神医学的観点から学習し、予防方法を考えることによって心の健康の保持・増進について理解を深めます。</p>
<p>健康統計学</p>	<p>統計学の考え方と手法を身につけることを目指します。具体的には、基本的な統計量(平均値、分散、標準偏差など)や資料整理の方法、相関と回帰分析、確率分布、区間推定や仮説検定(カイ2乗検定、t検定、F検定など)まで、統計学全般の基礎について学習します。また、学習した成果を実際に活用できるように、身近な統計データに対する表計算ソフトを利用した演習にも取り組むことで、実践的な統計解析の手法についても学びます。</p>
<p>基礎看護学</p>	<p>看護の理念を確認しつつ、看護の対象、歴史、機能と役割、看護過程等について学びます。受講者は、基礎看護技術に触れながら、看護実践の基本を習得します。幅広い人間理解と科学的思考、健康生活の理解など、確固たる人間観や基礎的学習能力を養い、看護学への理解を深めます。看護の「人間と健康に対するまなざし」「相手の立場」の理解などを通して、看護の心を考えていきます。</p>

◇健康システム学科 主要科目の特長

科目	特長
看護学Ⅰ	<p>基礎看護技術を習得し、よりよい看護ケアにつながる看護知識、技術、態度を学び、養護教諭にとっての看護実践とは何かを学びます。健康の保持増進及び回復のために、看護に何ができるのか、対象に必要な看護とは何かを考えます。病気の経過を知りその症状の訴えを聴くことから病者を理解し、治療や処置に伴う看護を科学的根拠を持って理解する大切さを学んでいきます。</p>
臨床看護実習	<p>養護教諭として必須事項である「看護学」の最終段階にあたります。これまでの学びを発展させ、患者と深く関わり、高度医療や医療的ケアに触れながら、養護教諭としての専門性を高めていきます。受講者は、看護の仕事や役割に触れ、受け持ちの患者様を通して、看護過程の実際を体験的に学び、子どもたちの健康課題に養護教諭として何をどのようにするか的基础を学びまた、実習を通して、自らの課題を明らかにします。実習は、春季休業期間中に配当病院にて、2週間おこないます。</p>
救急看護(救急処置を含む)	<p>教育活動やスポーツ活動においては、予期せぬ発病や事故や外傷が起こります。その初期対応や処置の仕方、対応の良否はその後の経過に影響するとも言われます。授業は複数の担当者によるオムニバス形式で進めていきます。受講者は、救急処置に必要な知識と技術を習得します。また、具体的な場面を想定した救急処置の実践的能力を身につけ、教師としての専門性に生かせるよう主体的に取り組むことが求められます。災害救護活動、特に、救急蘇生法をはじめとした基本的な救急処置ができるように体験的に習得します。</p>
卒業研究Ⅰ	<p>学科必須科目の中で、学科教育の集大成として全員が必修する重要な科目です。学科専門領域の中から、各自が関心をもつテーマについて、指導教員につき、「卒業研究Ⅰ」と「卒業研究Ⅱ」を通して研究を深めます。Ⅰでは、研究テーマに関する情報を収集し、研究方法を学び、考え、各自の立てた計画に従って実験や調査、文献収集などをおこないます。指導教員との密なコミュニケーションと主体的な研究姿勢が求められます。Ⅰ期の終わりには、指定期日に指定書式による中間報告書を提出する必要があります。この研究の初期段階における具体的な研究活動を通じて、これまで学んできた専門領域の理解とその拡大を目指します。</p>

◇健康システム学科 主要科目の特長

科目	特長
卒業研究Ⅱ	<p>卒業研究Ⅰで進めてきたテーマを深め研究課題の核心に迫ると共に、その成果を論文に仕上げ、最終発表会に向けて準備を進めます。研究の進行状況は、テーマによって異なりますが、各自が計画に従って着実に進めていきます。収集したデータの処理や分析、考察など、質の高い研究になるよう指導教員に助言を求めるなど、主体的に取り組むことが肝要です。この授業を通じて課題解決へのスキルだけでなく、集中力や克己心などさまざまな力を養っていきます。論文は、指定期日に指定場所に提出し、受理された人のみ発表する資格が与えられます。学科生が全員参加する卒業研究発表会において論文にまとめた成果を発表し、修了となります。</p>
教育原理	<p>人間形成の意義と課題を教育原理的側面から論じてゆく。そのうえで、多くの教育問題が発生する今日的課題として、様々な教育思想家の主張を援用しつつ、学校生活を含めた人間関係の深化、生きる意味を探究する援助者としての教師論などにも言及したい。また社会で求められる教育的課題という観点から、教育の基本原則、西洋と日本の教育理念と歴史、発達と教育、家庭・地域教育、新学習指導要領等の特徴と課題、現代教育の課題等の領域について論じていきます。</p>
教育心理学	<p>教育心理学は一般心理学の応用部門であり、また教育科学の一分野です。教育が生きた人間を扱う実践的な営みであることから、教育心理学も対象である子どもたちの人間形成に関わる科学として、独自の理論と方法を提示しなければなりません。子どもの立場と教師の立場を考えながら、しかし、教室だけでなく、社会で応用できる教育心理学を理解し、人間科学的視点を養っていきます。授業では、広範な領域の中から「発達」と「学習」に重点を置き、パーソナリティと適応、測定と評価や学級集団、教師の心理なども含めて、教育実践に役立つ心理学とは何かを考えていきます。</p>

◇健康システム学科 主要科目の特長

科目	特長
<p>保健・保健体育科教育法Ⅰ (保健教育内容研究)</p>	<p>中学校ならびに高等学校における保健科教育の目標、内容、方法、評価についての基本的事項とそれらの関連を明確にしながら、授業計画の手順を踏まえて学習内容を措定するに至る過程を理解でき、また試行できるようになる。そのため、中学校ならびに高等学校の保健科教育について、学習指導要領の検討、保健教科書における内容の分析・考察を通して理解を深め、保健授業の内容措定に至る過程を繰り返し確認します。</p>
<p>中学校教育実習(事前事後指導) 中学校教育実習 高等学校教育実習(事前事後指導) 高等学校教育実習</p>	<p>教育実習は、大学で学んだ知識や理論、あるいは技術を実践の場で具体的に展開させうる能力を養う場です。実際の授業や生徒指導を行うことを通じて、今まで学んだ理論や知識を結びつけて、生き生きとした教育を展開することが期待されます。教育現場実習における事前指導では、実習にできるだけ抵抗感なく臨めるようにするとともに、教育実習に際して求められる必要不可欠な基礎的な事柄を確実に身につけます。教育実習の事後における指導では、教育実習を通して学んだことを、教育実習前の自己の教育観、学校観、生徒観等と対比しつつ整理しながら、各自が適正な自己評価と反省を踏まえて、今後の学校教育や教師の課題を認識し、その後の学部における教育、研究に十分役立つようにすることを目的としています。</p>
<p>養護実習(事前事後指導) 養護実習</p>	<p>養護実習はこれまで大学で学んできた専門知識や理論、技術や感性を実践の場で展開し、実践する能力を養い、評価する機会です。3年次の事前指導では、4年次に実施される小・中・高等学校での養護実習の準備として、養護教諭の専門的職務内容、実習に必要とされる技術や知識など、学校現場に出ていくために不可欠な事柄を確実に身につけていきます。また、学校における養護教諭の役割と意義について再確認し、教師としての能力も同時に高めていきます。受講者は、希望する養護教諭の免許取得に向けて、具体的な対策を講じる中で、自らの課題を確認し、心構えも含め、準備をしていくことができます。実習の事後指導では、実習での学びを確認し、実習以前の教育観、生徒観との比較や実習評価から、自らの課題を明らかにし、真の教育者として育つための対策を講じていきます。</p>